

# 聖アグネス祭前夜

## — 1つの青春の通過儀礼

### *The Eve of St. Agnes*

#### — A Ritual Ceremony for a Transition to Adulthood

吉賀 憲夫

YOSHIGA, Norio

**Abstract** Keats' *The Eve of St. Agnes* was interpreted variously: romantic tapestry of unique richness of color, "a fantasy of wish-fulfillment" and so on. Jack Stillinger, however, challenged these traditional readings and regards Porphyro as a villain but all characters in the poem seem faithful. Even Porphyro. They play their roll according to a ceremonial order. The poem is a ritual ceremony of a transition for the young couple to enter into adulthood.

*The Eve of St. Agnes* is a poem of transition: a transition of adolescence to adulthood. It is also a transitional poem for Keats who was about to leave "the Chamber of Maiden Thought" for dark corridors where "Burden of Mystery" rules. The poem reflects his idea of imagination, poetry and poets' task which he expressed in his letters. His idea of dream and reality in the poem developed into the bitter contrast between the world of imagination and reality in *Ode to a Nightingale*. The relation of Madeline as a goddess with Porphyro as a pilgrim also presents obvious parallel with that of Psyche with the poet as a priest in *Ode to Psyche*.

#### 1

キーツは叙事詩「ハイピーリオン」を中断し、イザベラ・ジョーンズの勧めにより聖アグネス祭にまつわる伝説、迷信を背景とした作品『聖アグネス祭前夜』を書いた。それは1819年1月から2月にかけてのことであった。

聖アグネスとは異教徒との結婚を拒み殉教した古代ローマ時代の少女であり、聖アグネス祭の1月21日の前夜にあたる20日の夜、断食して決められたとおりの手順に従い床についた乙女は、その夢の中で将来の夫に会えるという言いつたえがあった。

キーツのこの作品はロミオとジュリエットを想起させる。敵対する2つの家の相思相愛のポーフィローとマデラインが厳冬の聖アグネス祭前夜、駆け落ちするという筋立である。ストーリー自体は決して手に汗を握るという緊迫した冒険談ではない。それはむしろ静謐に満ちた色美しい絵画である。事実この

詩の批評は「物語と言うよりむしろ絵画である」<sup>1</sup> というリー・ハントから始まったといってもよいほどである。またキーツ自身このことを自負していたようである。しかしこの作品をただ単に「独特の色彩の豊かさをもつロマンティックなタペストリー」<sup>2</sup> として片づけてしまうわけにもいかないだろう。必ずしもこの作品の豊穡さからではなく、むしろその曖昧さからであろうが、実に数多くの解釈がこの作品になされているのである。

様々の解釈のうち数例を挙げれば、古典的なジョン・ミドルトン・マリー<sup>3</sup> やペティト<sup>4</sup>の物語の展開から官能的愛の成就とする解釈、ミリアム・アロッド<sup>5</sup> や数多くの批評家による詩人キーツの夢と現実における願望成就のファンタジーとする解釈、ワッサーマン<sup>6</sup> の作品をキーツの形而上学的思想の反映とするもの、ジャック・ステリンジャー<sup>7</sup> の登場人物の性格や意図の分析からの作品解釈などがある。またこの詩にキーツの伝記的要素を重ね合わせること

も可能ではあるが、作品解釈の決め手となるはずはない。

『聖アグネス祭前夜』をひときわ印象深いものに行っているのはキーツの技巧である。夢と現実、寒さと暖かさ、愛と敵意、キリスト教的イメージと異教的イメージ、音楽と静寂といった対立が全編に散りばめられている。この対立の概念はこの詩の基調となっている。しかし逆に登場人物に関しては、個々の強烈的な意志というものを感じられない。マデラインはただ夢に身をまかせているだけであり、ポーフィローは単身危険を冒し敵の館に忍び込んだにしては当初の目的意識が薄弱である。ステリンジャーの言うようにポーフィローは「策略」をもってマデラインと「甘美な融合」を計ろうとする「悪漢」<sup>8</sup>なのであろうか。老婆アンジェラの真意も計ることが出来ない。彼らはすべて聖アグネス祭前夜の妖しく美しい魔法に操られているのである。

## 2

『聖アグネス祭前夜』は厳冬の夜の描写から始まる。

## I

St. Agnes' Eve—Ah, bitter chill it was!  
The owl, for all his feathers, was a-cold;  
The hare limp'd trembling through the frozen grass,  
And silent was the flock in woolly fold:  
Numb were the Beadsman's fingers, while he told  
His rosary, and while his frosted breath,  
Like pious incense from a censer old,  
Seem'd taking flight for heaven, without a death,  
Past the sweet Virgin's picture, while his prayer he saith.

第1連は巧妙な映画のカメラワークを見ているようだ。最初は寒さの中、戸外で毛を膨らませて丸まるとなって静止している鼻が大写しに写し出される。次に寒さのため麻痺した足で走る兎が動きをもって撮られる。カメラは兎が走って行く方向を追って行き、やがて身を寄せあう白い羊たちがロングショットで撮られる。その向こうに館が見えているのであろう。その館の中へとカメラは入って行き、祈祷僧の寒さで麻痺した指先が写し出され、次に数珠が、それから祈りを唱える口元から白くたち上る息、その息を追って行くカメラはマリアの絵姿をとらえる。

この物語の導入として、戸外から物語の舞台となる館の中に読者の視点を移動させる手法は見事と言うほかはない。しかも戸外の寒さは礼拝堂の中まで引き継がれており、この連の寒さの基調を保っている。この滑らかな視点の移動というか、戸外から館の中への切り替えというものは主人公ポーフィローの視点でもあり、また彼の館の中への侵入の容易さの予兆でもある。またそれは最終連においてポーフィローとマデラインがこの館を幽霊のように抜け出す保証ともなっている。

イメージの展開の素早さも物語の導入として鮮やかである。キリスト教徒を象徴する羊から祈祷僧、祈祷僧から祈り、そして聖母マリアの絵姿 (Virgin's picture) と移って行き、Virginというイメージからマデライン、また羊の群から後で出てくる聖アグネスの子羊へと続く。

先にも述べたように、戸外の寒さは館の礼拝堂へと続いている。この場所は戸外と館の接点となる所である。従ってこの場所で祈りを捧げる祈祷僧は自然界と人間界との境界に位置することになる。館では大勢の客を招き、宴もたけなわであった。祈祷僧は突如聞こえてきた音楽の美しさに涙を誘われるが、それを振り切り、荒い灰のなかに座り苦行を続ける。この禁欲的態度は、かつて快樂の喜びを知った人間ゆえの反応といえよう。彼にとって宴会の行われる部屋、言い換えれば世俗世界は魂の救済のため捨て去らねばならないものであった。それはちょうどキーツが官能美の世界を、より高貴な人生のために捨てなければならぬ『睡眠と詩』の中で宣言した精神と同じである。<sup>9</sup>

マデラインもまた次元は違うにしても同じ思いであった。聖アグネス祭にまつわる迷信を信じ、心は宴の場にはなく、夢の中に現れる未来の夫の姿を見るため大広間を後にする。彼女が夢中になっている儀式は祈祷僧の正統なキリスト教のそれとは異なり、異教的とは言わないまでも民間信仰の類のものであった。マデラインも祈祷僧もその館の中ではバラレな関係<sup>10</sup>にある。しかし求めていることは大いに違うのである。死にそなえ自らの、また罪人の魂の救済を求める祈祷僧に対し、この現世をともに手を携えて生きて行く伴侶の姿を夢の中に見ようとするマデラインとの間には生と死の違いがある。

この詩の導入部における祈祷僧の出現はなにを意味するのか。彼の記述は最初の4連に出てくるほか

は最終連に彼の死が述べられるだけである。この礼拝堂も二度とその後の物語には出てこない。ブリッジス<sup>11</sup> が考えるように祈禱僧は第5連の大広間の着飾った宴会の客、またその中のマデラインへと視点を移して行くための中間的役割なのであろうか。物語の構成上は確かにそうである。しかしその他にこの祈禱僧には重要な意味あいがあるように思える。それはこの物語の読者に基準となる視点、もしくは目の高さというもを与えているのである。読者は祈禱僧のいる礼拝堂の寒さを基準とし、宴会場の暖かさ、マデラインの寝室の肌寒さ、また戸外の厳しい寒さを押し量るのである。また祈禱僧の禁欲的度合いと、宴会の客、マデラインとボーフィローの快樂の距離を感じとるのである。また制度として形式として定着したキリスト教の儀式と、庶民の間に根強く残る、ある種の活力と豊かさを持った民間信仰や迷信との差異を知るのである。

3

第5連において宴会の大広間にただ一つのことしか頭にないマデラインが登場する。それは老婆たちが何度も何度も話して聞かせてくれた聖アグネス祭の前夜に夢の中で起きるといふ言いつたえについてであった。

VI

They told her how, upon St. Agnes' Eve,  
 Young virgins might have visions of delight,  
 And soft adorings from their loves receive  
 Upon the honey'd middle of the night,  
 If ceremonies due they did aright;  
 As, supperless to bed they must retire,  
 And couch supine their beauties, lily white;  
 Nor look behind, nor sideways, but require  
 Of Heaven with upward eyes for all that they desire.

マデラインはこの空想に頭が一杯になっていて、第3連で祈禱僧の涙を誘った音楽もまるで耳に入らない。年老いた祈禱僧にとって美しい音楽はかつて彼の経験した青春を思い出させるものであるが、決してそれを取り戻すことはできないことを彼は知っている。また彼の前に横たわっているものは死であることも十分に知っている。しかし若さと美の頂点

にあるマデラインにとって、愛と未来の夫の方が重大事である。彼女の前には生の豊穡が横たわっているのだ。

マデラインは聖アグネス祭前夜に夢の中で起きることへの空想で、現実が見えない状態(Hoodwink'd with faery fancy)で、なおも退出の機会を失い、広間に留まっている。そのころボーフィローは荒野を横切り、マデラインの住む館へとたどり着く。彼は玄関の側に月光を浴びて立ち、マデラインの姿を見させてくれとすべての守護聖人に祈る。しかしまた同時に彼はすべての目に見えぬ霊(all unseen)を見、祈り、またおそらく話、跪き、触れ、キスしたかもしれないとあるように、彼はキリスト教の守護聖人だけでなくマデラインが信じる妖精達をも信じる立場にある。言い換えれば彼は祈禱僧的なものとマデライン的なものとの両方を兼ね備えている。

彼は館へと忍び込む。この館の中では身も心も弱った老婆アンジェラだけが味方である。第11連で彼はアンジェラに出会う。彼女はすぐにこの危険な館から立ち去ることを勧める。しかし彼が逃げて行くわけがない。彼は執拗に、また聖アグネスの聖なる機械織機にかけて、マデラインに会わせてくれるように頼む。彼女は始めてその夜が聖アグネス祭前夜であることに気づき、次のように言う。

"...St. Agnes' Eve!

God's help! my lady fair the conjuror plays  
 This very night: good angels her deceive!  
 But let me laugh awhile, I've mickle time to grieve."  
 (II. 123-6.)

彼女はマデラインが夢の中で未来の夫に会えるように神の加護を願うが、少し笑わせてくれと言う。この「笑い」の意味は祈禱僧の音楽に対する「涙」とパラレルとなる。彼女は幼いマデラインに幾度となくこの話をしてやったに違いない。そして彼女は今もそれを信じ、今夜それを実行しようとしている。迷信とはいえ、それにすがろうとしているマデラインのいじらしさに、また大人になってもそのような迷信を信じている彼女に対し、まだまだ子供だなどという思いが彼女を笑わせたのであろうが、もう一つ重要な理由がそこにはある。それはもうアンジェラがそのような事柄に興味もなく、また信じることもできないという老婆としての立場に気づいているか

らに他ならない。祈禱僧が音楽に対し涙を流しながらもそれを拒絶したのと同じである。

ポーフィローは今宵マデラインが未来の夫の夢を見るべく、まじないをかけて眠ることを知り、感動の涙を流すのであった。そして突然彼は「満開に咲いたバラの花のように一つの思い」を思いつく。その策略(stratagem)は彼の顔を赤らめ、心臓をときめかすものであった。しかしそれが何であるかはまだ読者には分からない。このことをアンジェラに打ち明けると、彼女は残忍な悪党であると彼を罵る。彼の、マデラインを傷つけない、彼女の巻き毛一本さえも動かさない、彼女の顔を悪党の激情で見ない、という言葉を通してその内容は徐々に読者に暗示されて行く。しかしついに彼の説得に応じ、彼女はいかなることが起きようとも彼の手助けをする事を承知するのであった。彼女が約束したことは彼をマデラインの寝室に導くことであった。アンジェラは彼をマデラインの部屋に案内し、今からごちそうを部屋に運び込むと言い、またマデラインのリュートの在処をつたえ部屋を出て行く。その時彼女は、彼は必ずマデラインと結婚しなければならぬ、そうでないと彼女は天国に行けないと言いつつ。この言葉はこの計略に荷担するアンジェラの罪の意識であり、またポーフィローに対する願いでもあった。

彼女の部屋に潜むポーフィローのもとにマデラインが戻ってきた。それも彼女を「驚いて逃げていったジュズカケバト(ring-dove)」という表現を使っている。ステリンジャーは彼女に対して一連の鳥のイメージが使用されていることに注目し、ここにハンターとしてのポーフィロー、方やハントされる側の鳥としてのマデラインを見ている。<sup>12</sup> またまじないが破れるため、声一つ出さない彼女を、“a tongueless nightingale”と表現していることから、ギリシア神話のフィロメルの陵辱を暗示させるとし、マデラインとフィロメルの比較は不相当であるとは言えないと言う。「舌のないナイティンゲール」にはレイプかどうかは別として、これからのポーフィローとマデラインに何が起きるのかを暗示するイメージとなっていることは確かであろう。

彼女は部屋の中で祈りを済ませ、宝石をはずし、着衣を脱ぎ、眠りにつく。それをポーフィローは隠れて盗み見ることになるのだが、これは彼女が寝入るのを待つ間の間奏曲とでも言うべきものであり、とりたてて議論すべき事柄ではない。しかしこの間

奏曲が一枚の極上の絵画となっていることこそ、キーツの腕の見せ所であり、この作品のおもしろさの一つなのである。

## 4

第28連でマデラインは眠りに落ちる。ポーフィローはテーブルを取り出し、アンジェラの用意してくれた異境の地からもたらされたエキゾチックな食べ物を黄金の皿や銀の籠に盛る。その香りは彼女の眠る肌寒い部屋に満ちる。しかし元来、聖アグネスの伝説に食べ物の話はない。従ってこの食べ物の件はキーツの創作といえる。そしてこの食べ物に関しては、実は現在の第6連と7連の間におそらく出版社によって削除されたと思われる次の詩句があった。

’Twas said her future lord would there appear  
Offering as sacrifice—all in the dream—  
Delicious food even to her lips brought near:  
Viands and wine and fruit and sugared cream,  
To touch her palate with the fine extreme  
Of relish; then soft music heard; and then  
More pleasures followed in a dizzy stream  
Palpable almost; then to wake again  
Warm in the virgin morn, no weeping Magdalen.

眠りについた乙女はまず食べ物により味覚と嗅覚から感覚を高められ、続いて音楽により聴覚が心地よく刺激され、その後さらなる官能が彼女を襲い、そして聖アグネス祭の朝暖かく目覚めると言うのが、この削除された部分の意味であるが、それが第31連と33連においてより豊かな表現で再現されているのである。第31連で盛りつけられたごちそうに手が付けられなかったのも、これらの食べ物が夢の中で現れる未来の夫により彼女に与えられる物であったからであった。しかし原文にしたがえば、この食べ物は女神としてのマデラインへの供え物とするべきであろう。ポーフィローにとってマデラインは彼の女神であり、彼女との愛の成就是第38連での巡礼の「銀の宮」への到達に例えられている。

Ah, silver shrine, here will I take my rest  
After so many hours of toil and quest,

A famish'd pilgrim,--saved by miracle.  
(ll. 337-9)

さて、儀式は終わった。ポーフィローは彼女の目を覚まそうとする。しかし彼女は深い眠りに落ちていて、聖アグネスの魔法から醒めそうにもない。そこで彼はリュートをとり、プロヴァンス地方に伝わるが、長い間演奏されることもなかった『つれない美女』を演奏する。この音楽演奏も先に引用した削除された詩句が参考になる。本来はこの音楽は夢の中で聞かれるのであり、夢の官能を高める目的を持っていたのであるが、最終的な形ではポーフィローがマデラインの目を醒ますためリュートを弾くようになっていく。そのリュートの音に夢を妨げられ、マデラインは目を大きく見開くが夢の中と同じ顔を見ていることに気づく。しかし両者には恐ろしいほど違っていることに気づく。

Her eyes were open, but she still beheld,  
Now wide awake, the vision of her sleep:  
There was a painful change, that nigh expell'd  
The blisses of her dream so pure and deep:  
(ll. 298-300)

彼女にしてみれば夢から覚めて現実のポーフィローを見ているのか、それとも夢の中のポーフィローが変容したのかわからない。しかしそれは確かに現実であった。

聖アグネスの言いつたえでは、その夜乙女は夢の中で未来の夫を見るという。彼女は確かに夢の中でポーフィローを見たのであった。夢の中ではその彼の言葉は甘く、打ち震え、彼の憂えを秘めた目は霊的で澄み切っていた。しかし彼女が目覚めて見るポーフィローは青ざめ、冷たく、陰鬱であった。彼女は次のように言う。

How chang'd thou art! how pallid, chill, and drear!  
Give me that voice again, my Porphyro,  
Those looks immortal, those complaining dear!  
Oh leave me not in this eternal woe,  
For if thou diest, my Love, I know not where to go.  
(ll. 311-5)

彼女の聖アグネスのまじないは効を奏し、将来の夫ポーフィローを夢に見ることが出来た。そして目

覚めた後そこに彼を見たならばそれは二重の喜びと言うべきで、何も悲しむ理由はない。目覚めてそれが真実となればそれは正夢であり、キーツが想像力の例えとして用いた「アダムの夢」<sup>13</sup>に当たる。問題は彼女は夢の方を善としたことであった。彼女にとって空想と魔法が織りなす夢の方が現実より豊かに思えたのであった。彼女は自らの目を現実から覆い隠したのだ。彼女が「私を永遠の苦しみに取り残さないで下さい」と言うとき、この苦しみとは夢の世界と現実の落差とするよりもむしろ「現実の世界での苦しみ」と考えたい。その理由は「永遠の」という言葉にある。夢と現実の落差が「永遠の苦しみ」とは思えない。また「もしあなたが死んでしまったら、どこへ行けばよいのでしょうか」と言う彼女の言葉は、言い換えれば、私を苦しい現実の世界に残酷にも連れ戻し、あなに棄てられてしまったら私はどうすればよいのか、という意味になるだろう。

このマデラインの言葉を聞き、ベッドの側に跪いていたポーフィローは立ち上がる。

XXXVI  
Beyond a mortal man impassion'd far  
At these voluptuous accents, he arose,  
Ethereal, flush'd, and like a throbbing star  
Seen mid the sapphire heaven's deep repose;  
Into her dream he melted, as the rose  
Blendeth its odour with the violet,--  
Solution sweet: meantime the frost-wind blows  
Like Love's alarum pattering the sharp sleet  
Against the window-panes; St. Agnes' moon hath set.

マデラインの言葉"voluptuous"、すなわち肉感的であり、官能的であり、欲情をそそのものである。立ち上がったポーフィローとその後続く星のイメージはソネット『煌めく星』の描写と一致し、その内容も酷似している。彼女との甘美な愛の融合のため、彼は「彼女の夢」の中へと、バラの香りがスミレと混じりあうように溶け込んで行く。二人は現実から再び夢の世界へと立ち戻り「甘美な融合」を遂げる。聖アグネスの月は沈み、凍るような風が吹きすさぶ。聖アグネスの月はステリンジャーの、処女の守護聖女アグネスと純血の女神シンシアの結合したイメージ<sup>14</sup>であるという指摘は的を得ている。その月が沈むというのは彼女の処女の喪失のメタファーである

ことは言うまでもない。

XXXVII

'Tis Dark: quick pattereth the flaw-blown sleet:

"This is no dream, my bride, my Madeline!"

'Tis dark: the iced gusts still rave and beat:

"No dream, alas! alsa! and woe is mine!

Porphyro will leave me here to fade and pine,—

Cruel! what traitor could thee hither bring?

I curse not, for my heart is lost in thine,

Though thou forsakest a deceived thing;—

A dove forlorn and lost with sick unpruned wing."

甘美な融合から覚めるとそこは暗く、翼の打ちつける現実であった。ここでキーツの「人生を多くの部屋を持った大邸宅」<sup>15</sup>になぞらえた比喩を思い出すことができよう。すべてが官能美に満たされた処女思想の部屋から神秘の重荷が支配する暗黒の廊下へと続くドアが四方に開く、とキーツは言っている。今ちょうどこの二人の恋人達は彼らの人生において今、暗黒の廊下にさしかかったのである。マデラインはそれでも処女思想の部屋が忘れがたく「夢ではないとは! ああ、悲しい」という。そしてポーフィローが自分を置いたままこの館を出て行くのではないかとの不安が彼女の脳裏をよこぎる。彼女の言う「ここ」とは夢の世界ではない暗黒の現実の世界であり、具体的には彼女が裏切ってしまった一族の館ということになる。「なんと残酷なこと! どんな裏切り者があなたをここに導いたの」と言うマデラインは心の底から怒っているわけではもちろんない。これは一種の嬌態であり、老婆アンジェラを非難をするものでもないし、あまり真剣にとってはならない。また彼女は自らを「欺かれた者」と言っているが、これには2つの意味がある。夢に欺かれた者という意味と、ポーフィローに欺かれた、つまり彼によって夢から現実に引き戻された、という意味である。ポーフィローはこの世が必ずしも夢に満ちた魔法の世界ではなく、生きるに過酷な場所であることを彼女に知らしめたのであった。

最終連の祈祷僧とアンジェラの死は華やかな生の横溢とは対極にある老いの結末であり、夢ではないこの世のごく普通の現実の一コマにすぎない。恋人達は嵐の中を駆け落ちして行く。これは二人の人生の前途多難を思わせるが、ポーフィローが用意した

荒野の南にある「ホーム」は唯一の救いとなっている。

5

最後にポーフィローの「策略」について考えておこう。彼が危険を冒し、敵であるマデラインの館に忍び込んだ当初の目的は何であったかは定かでない。おそらく、ただ恋しさのため彼女に会いに来たのか、それとも荒野の南にある家に彼女と駆け落ちするためだったかのどちらかであろう。しかしマデラインが聖アグネスの啓示に夢中になっていることを知るにおよび、ごちそうとリュートの演奏で彼女の夢を一層豊かなものにするため彼女の寝室に隠れるというのが当初の「策略」であったと考えられる。だから彼がアンジェラに彼女の巻き一本でも動かさない、また彼女を邪心で見ないと誓ったのも当然のことであった。従ってこの「策略」を思いついた時点では彼は「甘美な合一」まで至ることは考えてはいなかったと思われるし、ましてや彼が「策略」をもって彼女の夢を打ち破り、果ては力づくで彼女を得たというわけではない。「合一」に至るのは、たとえポーフィローが心の何処かで期待していたとしても、主としてマデラインの欲望を誘うような言葉 (voluptuous accents) にその契機がある。しかしこの作品はどちらが「悪い」とか「誘った」とか「悪者」だということは問題ではない。この二人の若い恋人達が夢から現実へと目覚め、新しい人生に踏み出したことこそ重要である。この作品の結末がハッピーエンドか否かという問題もしたがって、そんなに重要ではない。彼らは処女思想の部屋から次の段階に踏み出したのであり、その点でこの作品は青年から大人への通過儀礼のファンタジーであると言うことが出来よう。

キーツにとって、この作品は彼が手紙の中で述べた思想を具体的な詩的イメージで語ったものとなった。またこの作品の夢と現実という関係は、来るべき彼の傑作オード群の主題、*Ode to a Nightingale* におけるイマジネーションの世界と現実として、また女神マデラインと巡礼ポーフィローの関係は、*Ode to Psyche* のサイキとその司祭として見え隠れしているのである。その意味において『聖アグネス祭前夜』はキーツ自身が処女思想の部屋から神秘の重荷が重くのしかかる暗い廊下へとまさに出て行くとする

ときの処女思想の部屋の残光に浮かび上がった美しく官能的な作品であるといえるだろう。

注

1. Leigh Hunt, *The Indicator* (2 Aug. ,1820), *John Keats: A Critical Heritage*, p. 275.
2. Douglas Bush: *John Keats Selected Poems and Letters* (Boston,1959), pp. xvi, 333.
3. J. M. Murry: *Keats and Shakespeare* (Oxford University Press, 1925), p. 109.
4. E. C. Pettet: *On the Poetry of Keats* (Cambridge University Press, 1979), p. 212.
5. Miriam Allott: 'Isabella','The Eve of St. Agnes' and 'Lamia" in *John Keats: Reassessment*, edited by Kenneth Muir (Liverpool University, 1958), p. 55.
6. E. R. Wasserman: *The finer Tone* (The John Hopkins Univ. Press, 1953), p. 55.
7. Jack Stillinger: *The Hoodwinking of Madeline and Other Essays on Keats's Poems* (University of Illinois Press,1971),p. 84.
8. Jack Stillinger: *Ibid.*, p. 78.
9. *Sleep and Poetry*, II. 122-5.
10. Jack Stillinger: *Ibid.*, p. 85.
11. Robert Bridges: "Introduction" to the *Poems of John Keats*, ed. G. Thom Drury (London, 1896), p. lvii.
12. Jack Stillinger: *Ibid.*, p.76.
13. *The Letters of John Keats*, ed. Hyder E. Rollins (Cambridge, Mass., 1958), I, 185.
14. Jack Stillinger: *Ibid.*, p. 80.
15. *The Letters of John Keats*, ed. Hyder E. Rollins (Cambridge, Mass., 1958), I, 280-281.

(受理 平成6年3月20日)